

第101回 三方限古典塾 ('15, 3, 19)

洪 自誠 (1561~1616)「菜根譚」(その3-18)

- 1 事無きの時、心は昏冥し易し。宜しく寂々にして、照すには惺々を以てすべし。
事有るの時、心は奔逸し易し。宜しく惺々にして、主とするには寂々を以てすべし。

前集 173

(意識) 何の事件も起こらないときは、心がぼんやりとしてだらけやすい。だから、そのようなときには、心を静かに落ち着かせて、澄みきった明らかな気持ちで物事をみるようにせよ。これに対して、身边に何事かが起きた時には、心は浮ついて常軌を逸しがちになる。心を澄ませ明らかにして、静かに落ち着くことを中心にして対処せよ

(余説) 有時と無事を的確に区別して対処すべきであることは、家庭や社会・国家など何れにおいても重要な事です。有時と無事とでは状況が異なり、心の状態も異なります。それに適した心構えをもって対処できたときに、はじめて冷静な是非善悪の判断ができることとなります。

平時の際の原理と有時の際の原理とは別物です。その一方だけを尊重し、他方を忘れてはならないことであり、両者は表裏一体の関係であろうと思います。

(参考) 六然「自処超然。処人藹然。有時斬然。無事澄然。得意愴然。失意泰然」

(自分には物事に囚われず。人には心地よくさせ。有時にはぐずぐずせず。事なきには澄んだ気持ちで。得意には淡々と。失意には泰然自若としている。) (明・崔後渠)

- 2 節義を評する者は、必ず節義を以て謗を受け、道学を榜する者は、常に道学に因りて尤を招く。故に君子は悪事に近づかず、亦善名も立てず、只渾然たる和氣あるのみ。纔かに是れ身を居くの珍なり。

前集 176

(意識) 節操正義を表看板に掲げる者は、必ずその節操正義のために非難され、道徳学問を売りものにする者は、常にその道徳学問のために災いを招くことになる。だから賢明なる諸君は、悪に近づかぬばかりか、よい評判も立たないようにして、ただ円満で和やかな気持ちをもっていればよい。それが身の安全を守る最上の道である。

(余説) このようなことは、現代においても政治や先端学問の世界などで時折みられるところです。正当な主義主張でも拘りすぎると災いを招きます。一定の融通をきかすことも大切です。よい評判が立つと、それに伴って風当たりも強くなりがちです。

また、人が得意な分野を持つことは大切です。しかし、そこに落とし穴があり、ともすると、人は、得意分野で失敗することが多く要注意です。苦手な分野では慎重になりますが、得意な分野では回りを省みず、つい暴走しがちになります。そのことを日頃から心がけていたはずのわたしにも、かつて苦い経験がありました。

(参考) 言志録225 (佐藤一斎)「凡そ情の偏するは、四端と雖も遂に不善に陥る。」

四端とは、惻隱・羞惡・辞讓・是非で、仁・義・礼・智の糸口となるもの。(孟子) 孟子(離婁章句下)「為さざるあるなり。而して後、以て為すあるべし。」

世の中がどうであろうと、自分はこういうことだけはしない。これを節義という。

3 身を持つに、^{たも}太^{はなは}だしくは^{こうけつ}皎潔なるべからず。一切の^{おじよくこうあい}汚辱垢穢も、^{じよのう}茹納し得んことを要す。人と与するに、^{はなは}太^{ぶんめい}だしくは^{ぶんめい}分明なるべからず。一切の^{ぜんあくけんぐ}善悪賢愚も、包容し得んことを要す。

前集186

(意識) この世を安全に渡って行くには、あまりに潔癖すぎてはいけない。一切のよれやけがれも拒否せずに、受け入れて飲み込むような度量がほしい。

また、人と交わったり、物事を一緒に行うような際には、あまり好き嫌いの区別をはっきりしてはいけない。一切の善人・悪人・賢者・愚者を包容できるようでありたい。

(余説) 度量が大きくて包容力のあることを「^{せいだくあわ}清濁併せ呑む」と言います。ここでは、「^の善悪賢愚の区別なく、すべての人を受け容れる包容力をもて」と教えていますが、ともすれば差別する心が頭をもたげてしまいがちです。

仏教ではもっと根源的に「^{しやべつ}善悪賢愚を差別する心を捨てよ」と教えています。禅語にも「^{ふしぜんふしあく}不思議不思悪」(善をも思わず、悪をも思わず)があります。これは、是非・善悪・賢愚・優劣・自他・老若・得失・男女などのように、対立的に見ようとする分別心から脱却して、高い次元の絶対的な認識に立つべきことを求めています(難しいですね)。

(参考) 孟子^{りろう}(離婁章句下)「^{そうろう}滄浪の水、^{えい}澄まば以て我が^{あら}纓を濯うべし。滄浪の水、濁らば以て我が^{そうろう}足を濯うべし。」(滄浪の水が澄んでいたら、きれいな冠のひもを洗おう。濁っていたら足を洗おう。要は心がけ次第ではないか。)

※ 楚辞にも同文があるが、解釈のしかたがやや異なっている。

4 ^{しようよく}縦^{やまい}欲の病は^{いや}医すべし。而れども^{しか}執理の^{しゅうり}病は^{やまい}医し難し。事物の^い障は^{さわり}除くべし。而かれども^{しか}義理の^{さわり}障は^{さわり}除き難し。

前集 188

(意識) 本能的に私利私欲のまま行動することに凝り固まった者のくせは、治すこともできる。しかし、理屈に凝り固まった者のくせは、治すことが難しい。

具体的で物質的な障害は取り除いたり修理したりもできる。しかし、理屈や筋道にこだわったり、道理の上で欠陥があつたりする者の障害を取り除くのは難しい。

(余説) 深く現実を見すえたような人物論だと思います。私欲に凝り固まった^{しようよく}縦^{やまい}欲の病も困りものですが、これは人生経験や何かのきっかけで変わることも考えられます。

これに対して、客観性のない理屈のための理屈に凝り固まった^{しゅうり}執理の病^{やまい}の場合は、偏った価値観に囚われた性格からくる場合が多く、簡単には治らないと言われます。自分の意見を持つことはよいことです。しかし、それに頑なに固執して譲らないというのでは、自分の進歩も望めないし、周りとの関係も難しくなります。

例えば、物質や地位や名誉等に執着するようには見えない人物が、会議等で理屈にこだわりすぎ、言い出したら後に引かない、そのような性の人物に覚えはありませんか。

物事には、理屈の善悪だけでは解決できないことも多いように思います。

(参考) 巖海「^{じりょう}目覚めよ！自領の漢。御主の胸中に大気あり」

禅宗中興の祖である白隠禅師(1685~1768)が、24歳の時自己の見性悟道に自惚れているのを見た正受老人から「自分のことだけを考える男よ」と大喝された言葉です。白隠の著では「^{やせんかん}夜船閑話」が有名です。